

## 障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))

### 高次脳機能障害者の社会参加支援の推進に関する研究、失語症の社会参加

研究分担者 種村 純 川崎医療福祉大学 教授

#### 研究要旨

日常生活活動は自立し、失語症を含む障害のために一般就労困難な対象の実態を明らかにする目的で、就労支援施設における失語症者の就労支援の問題点と対応の実際を検討した。就労継続支援 B 型施設では失語症者は概して良好な適応を示した。失語症者では日常生活活動が自立していたが、日常生活関連活動には困難を示す者が多く含まれていた。ゲルストマン症候群に関連した障害、金銭の管理、作業手順、時計の読み、読み書き障害など、が職業生活上大きな阻害要因になっていた。そのため事務職等への就労は難しかった。

職務活動については、手作業等は慣れれば十分可能であり、持続力も認められた。サービス業などのコミュニケーション技能を必要とする業務、読み書き計算を要する事務的業務は困難であり、作業的業務が適していると考えられた。就労継続支援 B 型施設では作業的内容の業務が主であり、失語症者にとって適した環境であると考えられた。

#### A. 研究目的

失語症は、そのコミュニケーション障害のために就労に多大な困難を示す障害である。失語症者を対象とした医療機関における職業復帰成績は 10～30%である。一方で就労支援機関における失語症者の就労率成績を見ると 70～80%と、はるかに高い結果を示す。これは就労の意欲があり、就労の可能性のある者のみがサービスを受けていることで、このような成績差が生じていると考えられる。脳血管障害に対するリハビリテーションを経て日常生活活動が自立して就労に至る。脳血管障害者のフォローアップ調査では機能回復レベルと復職率は相関を示し、機能レベルの高い 25%程度が復

職する。一方、日常生活活動が自立しない者も 25%程度いる。その間に挟まれた 40～50%程度の日常生活活動は自立していても復職に至らない層が存在し、その中に就業年齢を超えた高齢者層や失語症等の複合的な障害を有する層が含まれる。この日常生活活動は自立し、失語症を含む障害のために一般就労困難な対象の実態を明らかにする目的で、就労支援施設における失語症者の就労支援の問題点と対応の実際を検討した。

#### B. 研究方法

##### 対象施設

岡山県内の就労継続支援施設のうち失語

症者が在籍している 3 施設を対象として、失語症者の就労支援担当者に面接調査を行った。それらの施設に在席した失語症者は計 11 名であった。

#### 調査内容

調査内容は施設の組織、規模、職員構成、失語症利用者の障害内容、発症からの経緯、サービスの利用期間、内容、支援方法、担当者の職種、社会的支援制度の利用、就労の要因、就労支援から見た就労の必要条件（コミュニケーション能力、その他）転帰であった。

### C. 研究結果

#### 施設の組織・概要

施設の組織・規模については、社会福祉法人で、サービス類型はいずれの施設も就労継続支援 B 型、同一施設に就労継続支援（一般型）やグループホームを併設し、入所希望にも対応している施設もあった。職種は職業指導員および生活支援員が中心で看護師、事務員、サービス管理責任者等、対象者は ADL 自立が条件となっていた。定員は各施設とも 20 名程度で、毎日 17, 8 名が来所している。

#### 失語症利用者の特徴

失語症者は通所でこれらの施設を利用しており、女性が 3 名、男性が 8 名、年齢は 40 歳代から 60 歳代までであった。原因疾患は脳血管障害 7 名、外傷性脳損傷 2 名、脳腫瘍 2 名であった。失語型は Wernicke 失語 1 名、Broca 失語 4 名、健忘失語 6 名で、重症度は中等度 3 名、軽度 8 名、片麻痺は 6 名であった。発症からの経過期間は 1 年から 13 年の範囲であった。日常生活活動で

は歩行、階段昇降および入浴は全員自立していた。バスや電車での外出、日用品の買い物および食事の用意は 8 名が自立、3 名が要援助、預貯金の出し入れについては 5 名が自立、6 名が要援助であった。通所は自力で可能である。公共交通機関を使っての外出に際して定期券を自分で買うことができない、食事の用意をする際に手順がわからなくなる、時計が読めない、預貯金等の金銭の管理について数字の処理能力が問題になる、などの問題点が認められた。買い物に自分から外出することはなく、業者が施設に訪問すると購入している。

会話能力については全員が要援助であった。1 対 1 であれば話しことばで理解可能であるが、ことばだけでは理解できない。理解面に障害を有する者は複数の利用者を対象とした指示を行う場面では、理解できずに混乱することがある。話しことばに文字や数字を補う。言語表現を工夫する必要がある。失語症者にかけることばは短く、書くときは箇条書きにする。会話を諦めないことが大切である。表出面では制限があるので、コミュニケーション相手がさまざまな対応をしている。人によっては言えないけれども漢字で一部書くことができ、それから話を展開することもある。失語症者は思い込みの修正に時間がかかる。言いたいことを「わからない」と言って済ませることがないようにする。そのためには時間が必要で、人手がかかる。電話の利用は家族など特定の相手に限られていた。情報量の多い書類の理解、さらには作成では、すべての失語症者が困難を示す。

大きな会社で部下を何人も抱えていた人は関わりに対してプライドが刺激される

と、「なに」、「わしは違う」などと、大きな声を上げる。知的障害者と同じような対応をしたら怒り出す。

開始時には1週間体験通所を行う。障害の内容によって対象者を決めるのではなく、施設における活動への適応性によって受け入れている。介護保険では就労系のサービスがないので、就労継続支援施設と介護保険のデイサービスやヘルパーを併用している人がおり、65歳以上では意見書を書いて許可を受けている。いくら歳をとっても働きたい、という希望がある。福祉制度上は三障害いずれかの手帳を持っている。身体障害者手帳を所持している人が多く、精神障害者保健福祉手帳の方もいる。身障手帳は1級2名、2級1名で、4級が8名である。

#### 作業内容

職業活動は工芸、印刷、発送などであり、個々の利用者に向けた作業を選んで行う。具体的な作業を通じて職業能力を評価する。職業活動について、失語症者は持続性があり、まじめで、疲れをいとわない。作業内容は、たとえばiPhoneのケースの包装を行う。工賃は1日来て150円で、交通費出してあげる。1月平均で7,000円前後になる。手当をつけてあげることが生き甲斐につながる。良く来ればその分手当が増える。そのためみんなほとんど来るし、遅れても来る。通所によって生活が変わる。パン工場の売り上げも良い。

職業活動以外の自立生活のための訓練も積極的に行っており、調理訓練、外出して買い物等の活動が行っている。切り絵の作品展を2カ所で行っている。作品を写真に撮って絵はがきにした。また、公演活動と

して笠地蔵と竹取物語のミュージカルを行った。ナレーション、台詞、振り付けを自分たちで考えた。仕事と余暇や休養の私的な時間のバランスが重要である。花見などの行事も行う。

これらの施設にはリハビリテーション病院、高次脳機能支援普及事業の支援ネットワークとともに小児療育施設や特別支援学校からの長い経過を経て本サービス利用に至った事例も含まれていた。これらの施設の利用終了後には一般就労とともに高齢者施設の利用に移行していた。

#### D. 考察

就労継続支援B型施設では失語症者は概して良好な適応を示した。本稿の最初に述べたように失語症者は就労に大きな困難を示す。しかしながら今回の調査対象の失語症者は就労継続支援施設内で与えられた作業内容を適切に遂行することができることもあった。本稿ではこれらの施設における失語症者に対する援助内容を検討し、失語症者の職業適応に必要な条件を検討した。

本研究の対象である失語症者では日常生活活動が自立していたが、日常生活関連活動には困難を示す者が多く含まれていた。種々の困難のうち、ゲルストマン症候群に関連した障害が職業生活上大きな阻害要因になっていた。金銭の管理、作業手順、時計の読み、読み書き障害のために書類を扱うことはほとんどできなかった。これらの問題点に対しては、直接的な指示によって練習することで対処していたが、半数以上の失語症者が適応できていなかった。

会話ではことばのみによる説明では十分理解されない。複数の者を対象とした指示

が理解されにくい。これに対して文字、数字を呈示し、また言語表現を工夫していた。思い込みを修正するのが困難で、「わからない」と言って本人が会話の継続を諦めてしまう。対応に時間をかける必要がある。また電話では会話可能な対象が家族などに限られていた。一方で自己意識が保たれているために他者と交わることに問題を示し、対応として人格を尊重する必要があり、人格の硬直化も考えられた。

職務活動については、手作業等は慣れれば十分可能であり、持続力も認められた。サービス業などのコミュニケーション技能を必要とする業務、読み書き計算を要する事務的業務は困難であり、作業的業務が適していると考えられた。就労継続支援 B 型施設では作業的内容の業務が主であり、失語症者にとって適した環境であると考えられた。

#### E. 結論

職務内容の指示を含むコミュニケーションにはいろいろな方法を合わせて、職場として最低限の意思疎通が可能であった。障害者に対する就労継続支援を行っている施設では失語症者が特に支援困難ということはなく、個別的な対応によって施設内作業は可能であった。コミュニケーションを含む APDL が自立可能となれば就労移行支援、さらには一般就労に結びついていた。通勤、一人暮らしや健康管理の自立が、一般就労に向けて援助を進めていく上での条件となっていた。

#### F. 来年度の研究計画

本調査を、より多くの対象施設・対象者

に継続するとともに今年度の対象者の経過を追跡し、より詳細な支援の流れを検討する。

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

種村純, 椿原彰夫: 同時失認. *Clinical Neuroscience* 32(2), 157-160, 2014

太田信子, 種村純: The Cambridge Prospective Memory Test 日本版の標準化と信頼性に関する研究. *高次脳機能研究* 33(3), 339-346, 2013

太田信子, 種村純: The Cambridge Prospective Memory Test 時間ベース課題の記憶ストラテジーに関する神経心理学的検討. *神経心理学* 29(2), 133-142, 2013

平岡崇: 高次脳機能障害外来のあるべきすがた-当院の取り組みと現状-. *リハビリテーション医学* 51(3), 183-186, 2014

宮崎泰広, 藤代裕子, 今井眞紀, 種村純: 数唱や無意味音列の復唱は可能であるが複数単語の復唱に困難を示した失語症例 ~ 言語性短期記憶についての一考察 ~. *高次脳機能研究* 34(1), 17-25, 2014

##### 2. 学会発表

種村純, 八島三男, 園田尚美, 山本弘子, 宮崎泰広: 失語症者の生活のしづらさに関するアンケート調査 2012、調査結果の解析的検討. 第 14 回日本言語聴覚学会 札幌, 2013.6.28

宮崎泰広, 池野雅裕, 関泰子, 山本千明, 熊倉勇美: 脳の器質的疾患により生ずる音の繰り返しの音響学的分析. 第14回言語聴覚学会, 札幌, 2013.6

宮崎泰広, 種村純, 新井伸征, 椿原彰夫: アナルトリーを呈した失語症例における音

読時の音韻的な手掛かりについて．第37回  
高次脳機能障害学会，松江，2013.11

### 3. 書籍

八島三男、園田尚美、山本弘子、綿森淑子、  
種村純、他：失語症の人の生活のしづらさ  
に関する調査結果報告書．NPO 法人全国失  
語症友の会連合会，東京，2013，1-130

種村純：言語治療法の考え方．失語症 Q&A、  
検査結果のみかたとリハビリテーション．

新興医学出版社，東京，2013，110-113

宮崎泰広：ことばの言い誤りが目立つ失語  
症者(伝導失語)に対する評価のポイント，  
言語治療の組み立てからや技法を教えて下  
さい。失語症 Q&A．新興医学出版社，東京，  
2013，134-136